

04・おやすみ前のいちやいちやタイム

とある年の初夏。六月下旬、二十四時ごろ。

場所は、主人公と唯為理の自宅。

外は晴れ、気温は非常に心地よく、最高の季節が続いている。

そんな、気持ちのいい平日の夜だ。

主人公、寝室で探し物をしている。

これからお風呂に入るので、脱衣所にパジャマを持つて行こうと思つたのだ。
……が、なぜか見つからないのである。

SE1　主人公が部屋の中を探し回る音

【最初から最後まで流す】

あれえ？　なんでだ。どうして見つからないんだろう？

昨日洗濯したばかりのを、ここに置いてたはずなんだけど……。
……とりあえず、座ろつかな。

流した後、5秒ほど沈黙。

SE2　主人公がベッドの上に座る音
【最初から最後まで流す】

主人公、とりあえずベッドに座る。

今朝置いたはずの場所には、結局見当たらなかった。

だが、洗濯されたというのは考えにくい。洗濯したばかりなのだから。

……うーん。唯為理ちゃんに聞いてみようかな。

でも、今唯為理ちゃん忙しいしなあ。

ていうか、今日もやつぱり、忙しいかなあ。忙しいよねえ……。

主人公、例によつて足と足を擦り付けながら、一人そわそわする。

今まで知らなかつたが、自分はえつちな事を考へてゐる時、足に出るらしい。つまり、唯為理といふ時は、しょつちゅう足をもごもごさせてゐるというわけだ。つまり今だ。今の事である。

……というわけで、唐突だが、今、主人公は唯為理とセツクスしたくてたまらない。あの、いかにも気の弱そうなふりをしながら、自分をどこまでも侵食する、深い深い唯為理の欲望にかき回されたい……と思つてゐる。

わかつてはいた事だが、主人公は結構なマジなのだ。

いかにも自分より立場や力の強い相手じゃなくて……一見目下のようと思える相手に、ぐつちやぐちやにされるのが大好きなのだ。

……これつて、相当マゾ度が高い気がする。

要するに『わかりやすいSな人じや足りない』つて事だもんね。

だけど唯為理は今、原稿の真っ最中だ。

これから大切な新作が生まれる所なのである。邪魔するわけにはいかない。

主人公は、唯為理の作品を、基本的にはファンとして楽しみたいと思つてゐる。つまり、他のファンが知り得ない事は、自分もあまり知らない方がいいだろう……。と、考へてゐる。

だから、一人だけ特別扱いはいけない。

……サインはもらつてしまつたけど。イラストもいっぱい描いてもらつてあるけど。それでも、できるだけ、そうする努力は必要だ。と、思つてゐる。

だから、詳しい事は聞いていない。

だが、推測できる範囲だと、今はどうやら二本同時進行で作業しているらしい。なので、それが終わるまで……あるいはどちらかが落ち着くまでは邪魔しないようにしたい。

具体的には、期間中、えっちへの誘いは控えるのだ。

はあ。ということで、邪魔な恋人にはなりたくないから、我慢してゐるんだけどね。もう、かれこれ一週間になるんだよねえ……。

ここ何日かは、一緒に寝る事すらままならないよ。

唯為理ちゃん。わたし、唯為理ちゃんが恋しいです。

主人公『はあああー……』と、大きくため息をつく。すでにパジヤマの事はすっかり忘れてゐる。

……だつてね、わたし。

三日前に『原稿が終わつたらたくさんいちやいちやしましよう』って言われてからこつち。

ずーつつと期待して待つては『あ、今日は無理そう』ってなるまで起きていてしまう。そんな事を繰り返してるんです。

ねえ！ 唯為理ちゃん。だからそんな愚かなわたしをそろそろ満たして？
一つもごまかさず素直になるから、いっぱいいやいやさせてほしいよ！

とは言つても、もちろん、このような事を本人に言うのは、ちゃんと、おかしいとわかつておりますので……。

主人公、ベッドに倒れ込んで、お風呂に入る事も忘れて唯為理を想う。

それから、唯為理と結ばれてから、今までとは別人みたいに素直に恋をしている自分を実感する。

これまではずつと、恋をして浮かれる事が怖かった。

いつも心に予防線を張つて、傷つかないように、物事を悪い方、悪い方に考えて、相手を好きだと思う気持ちすら否定しがちだつた。

素直に溺れていたら、誰かに『恥も外聞もなく夢中になつて、バカみたい』と笑われたり、水を差されたりするような気がしたのだ。

……自分が自分の事を、そう思っていたから。

でも、実際にはそんな『笑いに来る人』はいないのだ。
わざわざそんな事を言いに来る他人はもういないし、唯為理はそんな浅ましい主人公まで愛してくれる。

だから、それがいるとすれば、主人公自身なのだ。

だから、できるだけ素直でいたい。

今日だつて、これからお風呂に入つて、できるだけかわいくして。

空振りしてもいいからドキドキ期待して『今日こそ一緒に眠れるかもしれない』『もし
かしたら、何かあるかも』つて、唯為理ちゃんを待ちたい。

結局何もなくて、一人で眠る事になつて、がっかりしてもいい。

仮に唯為理ちゃんが現れても、『疲れてるからダメだな』つて判断して、それでおしま
いにするのだつて正解だ。

でも、こんなに待つてしまふ位唯為理ちゃんを好きだつていう、今の自分の気持ちだけ
は受容していたいんだ。

と、思つていると……。

SE3 唯為理の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【一番近づいてきても、まだ少し遠くで聞こえる】

唯為理ちやんがこつちにくる！

もももつ、もしかして！

SE4 寝室の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【少し遠くで聞こえる】

●中央 やや遠い

【意外すぎて驚いている。起きているとは思わなかつた】

あつ……あれ？

【主人公が、寝るには半端な状態でいるし、部屋がぐちやぐちやなので】

何かお探し物ですか？

〈主人公〉

「あっ。唯為理ちゃん！」

主人公、素直に舞い上がる。

もしかしたら『来てほしかった』と露骨に顔に出ているかもしれないが、かまわない。
……『えつちしたい』まで書いてあつたら、よくないけれど。

主人公、みるみるうちに期待して、興奮してくる。

もしかして。もしかして。今日こそは、もしかするのかな。
……でもまだ唯為理ちゃん、何も言つてないし。

原稿が終わつたとも限らないし、迷惑かけたくないし、まだ何も言つちや、ダメ。
……そうだ！ とりあえずパジャマの事を聞こう。そうしよう。

〈主人公〉

「うん。唯為理ちゃん、わたしのパジャマ知らない？」

SE5 唯為理の足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

唯為理、部屋の中まで入ってきて、立つたまま、ベッドに座る主人公と会話する。

●中央

「きよとんとして

パジャマ……？」

【察する。思い当たる節がある】

あつ。

【慌てて『まかす。本人は『うまく隠せた』と思つていて

いえ、知らないです。

お洗濯出しちやつたんじやないですか？】

〈主人公〉

「うーん……。洗濯したばっかりのはずなんだけどなあ。

ま、いいか。

唯為理ちゃんはどうしたの？ お仕事、今日はもうおしまい？

●中央

「話題が切り替わってラッキー」

あ、はい！ 今日はもう寝ようかなって思って」

〈主人公〉

「原稿はどう？ なんとかなりそう？」

●中央

「はい。今描いてる原稿……一つあるんですけど。

一つは内容が決まって、描くだけなので。こっちは大丈夫です。

でも、もう一つがいまいちで。だから、今日は深追いしないで休もうかと」

〈主人公〉

「いまいちっていうのは……」

●中央

「少し途方に暮れて」

どういう感じのえっちシーンにするか、まだ固まってないんです」

〈主人公〉

「なるほど……。

あの、何か私にできそうな事はある?」

●中央

「[少し驚く]
えつ」

〈主人公〉

「直接原稿を手伝う事はできないけど、相談位なら乗れるかも。
ていうか……それを言いたくて、待つてたんだよね。
なんでもいいよ。してほしい事があつたら言つて♥」

主人公、待つっていた理由自体は口からでまかせだが、力になりたい気持ちは本心だ。
作品の事は『あまり知らない方がいい』『首を突つ込まない方がいい』とは思つていたが、

唯為理から話してくれるなら話は別だ。ぜひ協力させて欲しい。
……自分から聞き出してしまったような気もするけれど。

とはいっても、具体的に何ができるのかは見当もつかない。

が……働きづめの唯為理に、ちょっとしたご奉仕ならできるかもしれない。

えつえつ、えつちとかじやなくて、たとえばマッサージとかで、ね？

……と、思う。

対する唯為理、その言葉に、先ほどの主人公以上に舞い上ががつていてる。

胸がいっぱい、じーんと熱くなつて、まだ何もされてないのに泣きそうだ。

大げさだと笑えばいい。自分は一年中大げさなのだ。

この人の事が大好きでたまらないのだ。と思う。

だつて、当然だが、主人公と交際する前は、こんな事はあり得なかつた。

『こんな事』というのは、仕事が思うようにいかず、疲れてへろへろになり、もう私なんて……。と、自己肯定感がとにかく低下している時に、恋人が待つてくれて……し

かも、優しくしてもらう事だ。

とにかく嬉しくて、ドキドキして『こんな夢のようだ』と思ってしまう。
だから、唯為理は、付き合い始めた頃のように緊張して、でも、はしゃぐ。

● 中央

【嬉しくて、上手く話せなくなってしまう。※マークまで、なんだかしどろもどろになる】
あつ……そんな風におっしゃってくれるなんて。

【少し間をあけてから】

すつごい、嬉しいです……。

【少し間をあけてから】

してほしい事、言つても、いいんですか？

【少し間をあけてから】

あの。そしたらあの。

三十分。ううん、十五分でいいのでつ……』※

（主人公）

「うん！ 言つて♥」

主人公が『おいで♥』と言わんばかりに両手を広げる。
唯為理はもう、一秒でも早くその胸に飛び込みたい。

●中央

「ものすごく嬉しい」

時間、下さい。

【少しだけ早口になる】

ちょっとだけ。ちょっとだけでいいんで。

イチャイチャして、リフレッシュしたいです……♥』

〈主人公〉

「いいよ。おいで♥』

対する主人公、唯為理の言葉を聞いた途端、自分でも意外な位、自然と『年上のお姉さん』になってしまう。

さっきまでの自分は、飢えた獣のようだった。

なのに、いざ唯為理を目にすると、なんだか優しい気持ちになってしまう。
『この子のためなら、何でもしてあげたい』と思ってしまう。

●中央

「喜んで抱きつく」

はい！ ギューッとして下さいっ♥」

SE6 唯為理の足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

SE7 唯為理が主人公に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

唯為理、主人公が座るベッドまで歩いて行つて、飛び込むように主人公に抱きつく。

それから、夢中になつて匂いをかぐ。

久しぶりの、本人から直に得る主人公の匂いだ。

肺一杯に、大好きな子の匂いを吸い込みたいと思う。

●中央 至近距離

〔嬉しくて仕方ない〕

ああ……ふふ♥ ふふふふ♥

〔うつとりと主人公の匂いをかぐ。声ではなく、鼻の音で表現する〕

すんすん♥ すんすん♥

〔うつとりと〕

あなたの匂いだあ……♥

〔夢中で主人公の匂いをかぐ。声ではなく、鼻の音で表現する〕

すんすん♥ くんくん♥ くんくん♥

〔甘えた声で。みるみるうちに興奮してくる〕

ああ……この匂い、好きい……♥ 今日、頑張つてよかつたです♥」

〔主人公〕

「ふふ♥ おおげさだなあ」

●中央

〔※マークまで、甘えた声で〕

大げさじゃないです♥

お仕事終わつて『疲れたあ』つてなつてる時に。

すぐ大好きな人によしよししてもらえるなんて、幸せすぎます。

こんなの♥ あなたに会うまでは、考えられなかつたんですから♥」※

〈主人公〉

「……それは、わたしも一緒。

ちゅつ♥」

主人公、やはり、思つていたよりもずっと自然に、ずっと優しく唯為理の額にキスをする。

唯為理といふと不思議だ。

そのメカニズムはまつたくわからないが……唯為理といふと、自分の性欲を否定しないまま、自然とそれをおさめて、優しく、包み込むような気持ちになれる事がある。

興奮よりもリラックスした気持ちが勝つて、こんな風に、じやれるようなキスができる。かといって、興奮が和らいだとか、えつちはもうしなくても平氣と、思つてゐるわけではないけれど……。

●中央

★【※10秒※ キスする。甘々にじやれあうようなキス。途中から舌を入れる】★

★ あ♥ ちゅつ♥ んんう♥ ちゅ♥ ちゅつ♥ ちゅ♥ れろれろ……れれれ……

♥ ちゅつ♥ んつ♥

【甘えた声で】

えへ……お疲れ様キス気持ちいい♥

【自分から積極的に二回舌を吸う】

ん♥ んんう♥

【興奮気味に、三回ゆっくり呼吸する】

はあ……はあ……はあ……

【唇に軽く一回だけキスする】

ちゅ♥

対する唯為理、主人公の匂いを嗅いでキスしているうちに、すっかり興奮している。

ここに来た時はただただ優しくされたい気分だったが、今は主人公をぺろぺろ舐めて、主人公を、唇と舌でいっぱい感じたい気分だ。

——したい。早くしたい。とにかく早くそれがしたい。

一度こうなると、唯為理はもう止められない。

唯為理、主人公の左耳に近づいて話す。

SE8 唯為理が主人公にさらに近づく音
【最初から最後まで流す】

●左

「【※マークまで、甘えた声で】

あのっ。

【少し間をあけてから】

お耳もしても♥ いいですか……？」

ここでフェードアウトして終了。